



中国文学

目加田 誠

岩国市

(1904～1994)



【著作】

『詩経』（昭和18・日本評論社）

『唐詩選』（昭和39・明治書院）

『目加田誠著作集』全八巻（昭和56～61・龍溪書舎）

【閲覧情報】

大野城心のふるさと館 ☎092-558-5000

【関連情報】

平成改元の際、政府より考案者の一人に選ばれた目加田の元号案メモは、「大野城心のふるさと館」に収蔵されている。

岩国市の目加田本家は、近江国愛知郡目加田村出身で、天正年間吉川春元に召し抱えられたと伝えられる。復元された現在の住宅は、十八世紀後半の建築と推定され、中級武家の住宅として全国的にも数少ない遺構の一つに取り上げられ、昭和四十九年二月、国の重要文化財に指定された。

末裔に当たる目加田誠は、「詩経」の時代から唐の杜甫まで千年に及ぶ中国文学の本質と美を追求した泰斗とされ、九十年の生涯を全うした。その偉業は、年譜に示した著書からも伺うことが出来る。

しかし、九十年の生涯のほぼ前半は、続く父母の早逝により、中学生にして長男の責任を負い、自身は病に侵される等、辛い時期を乗り越えて東京帝国大学支那文学科に入学。昭和五年、第三高等学校教授を拝命。翌年結婚。三年後には、九州大学助教授を拝命の後、文部省在外研究員として中国に留学。帰国した昭和十年、一子を遺して妻病没。二年後に再婚するも昭和二十二年、またも妻病没。

父母の死以来、誠にとって死はいつも隣り合わせであったことが『夕陽限りなく好し』（時事通信社・昭六十二）より伺われる。

更に戦後の厳しさの中、四人の遺児の養育を背負い（辞職を申し出ようとしたが同僚から諫められ、〈今の妻のお蔭で私は次第に立ち直った。〉とある。その妻は、福岡女専から九州大学に進み、卒業後、山口女専教授として赴任した瀬利さくを。僅か二カ年であったが、多くの学生に惜しまれ再び福岡へ。山口女専の教え子福田百合子は、山口女子大学と改まった母校の教授として勤め上げた。

昭和二十三年一月、目加田誠の妻となったさくは、母校福岡女子大学教授として勤める。その一方、自身の研鑽にも常に意欲的であった。後年、下関の梅光女学院大学教授を勤める等、山口との縁は深い。

誠後半生のさくをとの生活は、一女を授かり、家庭の安寧はもとより、中国古典文学者、日本古典文学者として双方の学問は益々進展していったことは、遺された膨大な蔵書からも伺われよう。

晩年の誠は、失明の進む苦しみの中で、件のエッセイ『夕陽限りなく好し』・歌集『残燈』を世に送り、多くの読者の感動を招んだ。

次は『残燈』での一首。

城山の麓の墓に父母は
いかに久しく我を待つらむ

父母の待つ岩国城山の麓の墓に永遠の安らぎを得たい心情が切に伝わり、共に、作者にとって岩国はやはり、血に繋がるふるさとである思いの深さをうかがわせる歌である。

さくをは、夫誠亡き後、平安文学に止まらず『世界小説史論』上・下（木星舎平二十二）を刊行。共に見事な生涯であった。

両氏の一万六千余の蔵書は、さくを没後御遺族により自宅のあった大野城市へ寄贈され、平成三十年七月二十一日に開館した「大野城心のふるさと館」に収蔵されている。今後同館では、「中国古典文学」・「日本古典文学」の講演会を開催すると聞く。

（文・多田美千代）



「大野城心のふるさと館」に展示の目加田誠著書